

【7】 考察と今後の課題

今現在の生活に、自分なりの考えに基づいて主体的に取り組み、その充実感や満足感を味わうことは、生涯にわたって、自分自身が生活の主体者として豊かに楽しく過ごそうとする力や意欲の素地づくりとなる。この考え方にたち高等部では、テーマを「自分の考えを持ち、活動のなかに喜びを見いだす生徒」と設定して、生徒一人ひとりの発達段階に視点を当てた題材選定や支援のあり方を、授業を通して追求してきた。

授業づくりの実践や個人事例のまとめにも述べているように、この研究実践を通して、生徒が授業の中で自分なりの考えを生かし、集中して取り組む姿をたくさん認めることができた。特に授業で高まった意欲が、休憩時間や放課後の自主的な製作活動につながった例や、家庭での手伝いが自分の仕事に発展し、家庭生活を主体的に過ごすことにつながった例などは、授業づくりを通して「生活を楽しむ子」を育てようとする我々の試行に、明るい見通しを持たせてくれた。また、在校生や卒業生の「生活を楽しむ」姿には、少しずつ主体性を発揮しながら、自分なりに喜びや満足感のある生活を過ごしている生徒の姿や仕事に打ち込みながら、仕事以外の生活にも、自分なりの楽しみを持って取り組んでいる卒業生の姿が、たくさんまとめられている。このような変容の姿から、生徒一人ひとりの発達段階を大切にしながら、題材や支援に視点を当てた授業づくりをすることが、「生活を楽しむ子」を育てる素地づくりになるという確証を得ることができた。

このテーマでの研究を通して、我々教師は「生徒に寄り添う」という姿勢を大切にしてきた。「寄り添う」とは、生徒の主体性を大切にしながら、学びたい、力をつけたいという生徒の内面的な欲求に応えていくということである。以前は指導を急ぐあまり、ややもすれば生徒を指示や命令で動かす傾向が見られたが、「待ち」を大切にし、生徒の思いを確かめながら次の指示を出す姿勢が変わってきた。また生徒の生活年齢を尊重し、「青年期にある高校生」としてとらえる姿勢を大切にするようになったのも、本テーマにおける実践の貴重な成果であった。

一方で課題も残された。「生活を楽しむ子」というテーマは、教師一人ひとりの解釈や生徒に願う像に幅があり、共通理解を図ることが難しかった点が、まず挙げられる。特に「楽しむ」については、認識によっては生徒の育ちを阻害するという不安があった。

また高等部のテーマには多くの意味が含まれているため、いろいろな方向からアプローチできるメリットがある一方で、間口が広がり過ぎて、実践が深まりきらなかったという課題も浮き彫りにした。本テーマの研究教科領域を、生活一般、職業、選択学習、特別活動の4場面に設定し、それぞれに研究の視点を持って授業実践を続けたが、今後は研究領域を絞り込むことで、多面性を持つ生徒一人ひとりに応じた支援のあり方を、みんなでもっと追求し深めていく姿勢を持ちたい。

学習に没頭する喜びを重ね深めることが、学習以外の生活場면을主体的に楽しく過ごす力の素地になるとはいうものの、本校の生徒には、生涯にわたって周囲の支援や環境づくりが必要である。生徒が受け入れられ、活動できる場を少しでも増やすために、さらに家庭との連携を大切に、周囲の理解を求める努力をしていきたい。

(出脇典子)